

2022 Autumn

母校通信 vol.150

"Mastery for Service"

これから先も、同窓生を繋ぐ母校通信を目指して。



関西学院の ルーツを巡る

原田の森編



W・R・ランバス(息子) J・W・ランバス(父)

関西学院は1889(明治22)年に原田の森で創立。学院に通う学生の数が増え、約40年後に上ヶ原へ移転しました。2022年は開学に尽力したJ・W・ランバス宣教師の没後130年。母校通信も150号を数えました。これらの節目をきっかけに、2号にわたって原田の森や上ヶ原など学院ゆかりの場所を訪れ、そのルーツを再確認していきます。



息子W・R・ランバスと共に 宣教に生涯を献げた 父J・W・ランバスが眠る 神戸市立外国人墓地へ

晴天に恵まれた6月30日。今年、没後130周年を迎えるJ・W・ランバス宣教師の墓前礼拝のために、六甲山系の再度公園にある神戸市立外国人墓地へ中道基夫院長と西名弘明会長、塚本恵美子編集委員長が向かいました。緑豊かな森の中にたたずみました。J・W・ランバス宣教師のお墓。中道院長の司式のもと墓前礼拝が行われました。J・W・ランバス宣教師に届くかのように、澄んだ森の中に響きわたる賛美歌。「日本で生涯を閉じられたJ・W・ランバス先生の情熱と役割、ミッションを、私たちが受け継ぐ者と

ならせてください」という院長の祝福で墓前礼拝は締められました。

中道 関西学院のルーツを探るには、まずJ・W・ランバス先生のルーツから紐解く必要があるでしょう。ランバス一家はアメリカ・ミシシッピ州でインディアンやフランスからの移民を対象とした宣教に従事する3世代にわたる牧師一族でした。J・W・ランバス宣教師は1854年に中国に派遣された最初の宣教師の一人でした。医療伝道に1886年まで従事していたと言われています。当時の中国は漢方での治療が中心で、西洋医療を学んだ人が外科的手術をすることが非常に珍しく、医療伝道病院には年間約50万人が集まり、約7万件の手術を行ったという記録が残されています。そんな奇跡のような手術を行う病院は素晴らしく、そしてキリスト教の好印象も民衆の間に広まりました。その後、

J・W・ランバス宣教師の人生が変わる出来事が起こります。1885年に南メソヂスト監督教会は日本海外宣教部を設立し、その活動に3千ドルを充当することを決めました。そこで日本行きを任命されたのが、中国で30年にわたり宣教に携わってきたランバス一家でした。

J・W・ランバス宣教師は1886(明治19)年4月に来日し、同年7月に神戸で宣教に着手。日本宣教の最高責任者には当時34歳の息子の若ランバス(W・R・ランバス宣教師)が任命され、同年11月に神戸に着任しました。「あなたのお父さんの年齢と健康状態を考えると、この重責をお父さんではなくあなたに命じるのは正しいことだと信じています。J・W・ランバスの長年にわたる信仰と外国伝道における愛と奉仕に対して変わらぬ尊敬と感謝を捧げます。お父様の得難い体験と修業はそのまま日本伝道に活かされ、受け

継がれることを信じて疑いません」という教会上層部の手紙が残っています。このように関西学院は親子二代で、父の熟練した宣教師としての経験と若ランバスの新しい感覚と情熱によって創設されました。

その根本にあるのは、「人を救いたい」という想い。宗教的な救いだけでなく、全人的な救い、つまり医療を通して体を救う、教育を通して知性を救う、宗教を通して心を救うということ。中学部や高等部でも推奨されているように、現代にも体育、知育、徳育という形で受け継がれています。当初、南メソヂスト監督教会から支給された3千ドルは活動するにつれなくなっていく資金でした。そこで多くのアメリカ人が使命を感じ、毎年関西学院やそのミッションに対して支援してく



中道基夫

1982(S57)年神学部卒業。1993年日本基督教団在外教師(ドイツ)。2000年から神学部教員、教授。2011年ドイツ・ハイデルベルク大学神学部にて神学博士号取得。神戸YMCA理事長。2022年4月から関西学院院長。



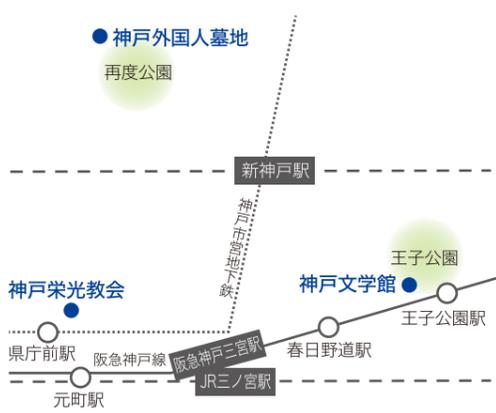
西名弘明

1968(S43)年経済学部卒。同年オリエン・トリス株式会社(現オリックス株式会社)入社。1998年取締役兼執行役員社長就任。2005年オリックス・リアルエステート(現オリックス不動産株式会社)代表取締役会長就任。2009年オリックス野球クラブ株式会社の代表取締役社長に就任し、現在は名誉会長。2018年4月同窓会会長に就任。



塚本恵美子

1968(S43)年文学部卒業。関西学院同窓会常任理事、編集委員長。朗読ボランティアグループ「花かご」代表、朗読講師。





J・W・ランバス宣教師の墓前にて

からこそ、今日の関西学院があるのだと考えています。

数々の苦難を乗り越え 人々の信仰を支えた 神戸栄光教会

神戸栄光教会の基礎は、神戸に着任したJ・W・ランバス宣教師が創立した日本宣教師部です。1923（大正12）年に赤レンガの第2会堂が建てら

れて以降、神戸のランドマークとして親しまれてきましたが、阪神・淡路大震災で全壊。2004年に元の外観を復元しながら、バリアフリーなども取り入れて再建されました。かつて中道院長が伝道師として働き、また居住していたこともあり、縁深い神戸栄光教会についてお聞かせいただきました。

中道 兵庫県庁をはじめ官庁街にたえず赤レンガの建物が神戸栄光教会です。

西名 街のシンボルとして、長年市民の皆様可愛られていますね。ランバス



主日礼拝や祝祭時は釣鐘の趣のある音色が街に響く

れたことに、私たちは感謝したいと思います。J・W・ランバス宣教師は墓石に刻まれている通り、1892年に62歳で亡くなりました。私とちょうど同じ年です。中国で約30年過ごし、その後日本へ派遣を言い渡されたときはどんな気持ちだったのかと思いますね。
西名 お父さんのランバスは使命に燃えていたでしょうね。
塚本 お墓が説教台の形になっているところからも、信仰の深さを感じますね。

中道 ええ。今となつてはJ・W・ランバス先生の気持ちはわかりませんが、彼の宣教師としての経験があつたからこそ、数々の教会を設立することができたと推測します。J・W・ランバス先生は関西学院のほか、パルモア学院や広島女学院の創設にも関わりました。今日の聖書朗読「出エジプト記3：7-12」にもありますように「今、行きなさい」や「人々を救いなさい」と神様から言われた言葉を大切にしていたランバス親子の情熱と信仰があつた

親子が神戸に住み始めた当初は、今の丸大神戸店の東側の居留地四十七番にあつたのですよね。

中道 ええ。1886（明治19）年9月に日本宣教師部が居留地四十七番に開設され、神戸栄光教会の起源となりました。W・R・ランバス先生は着任の2日後に早くも父と協力し、住居部を開放した「読書館」を中心に伝道と教育活動を始めました。この読書館はのちにパルモア学院として拡充されます。そして、伝道者の養成とキリスト教精神に基づく青年教育を目的とした男子の総合学園を開くために、神戸の東郊上筒井（原田の森）に1万坪の土地を購入し、神学部と普通学部をもつた関西学院を開校しました。

塚本 神戸栄光教会も関西学院の教育のルーツの場なのですね。

中道 その通りです。最初は南美以神戸教会と称し、のちに日本メソヂスト神戸教会、神戸栄光教会と改められました。建物自体は1887年に山二番館に移り、会員の増加で手狭になつたため翌年に現在の兵庫県庁東南角に第1会堂を建設し新しい伝道の拠点になりました。関西学院が創立されたのは、このような南メソヂスト監督教会による教会設立の流れから展開されました。初代牧師にはW・R・ランバス先生が就任し、翌年に父のJ・

W・ランバス先生が第2代牧師に、1893年には最初の日本人牧師として田中義弘第5代牧師が就任しました。1923（大正12）年に、現在の地に第2会堂が建てられました。これが長年にわたり「赤レンガの教会」として親しまれてきました。

の戦禍は逃れましたが、会員は減少しました。その後持ち直すも、1960年代後半からの学生運動の影響を受け、青年が激減したりしました。そこから立て直すために地道な取り組みを行ってきました。その一つの成果として、1986年の創立100周年行事で青年たちがロック・オペラ「ジーザス・クライスト・スーパースター」を自演したことは忘れられない思い出です。

塚本 1995年の阪神・淡路大震災で教会が全壊してしまつたのも残念でしたね。

中道 会堂を失つた後も、10年近く毎日曜日の礼拝はテントの会堂で守り続けてきました。皆さんの旧会堂への愛着が深く、元の赤レンガ造りの姿で建て直すことになり、2004年9月に新会堂が再建されました。

塚本 神戸栄光教会も関西学院も私たちの心象風景となつていきますよね。同じ姿で在り続けているということが大きな安心感をもたらしてくれています。

中道 現代はグローバル化し、外国の香りを感ぜられる空間は珍しくなくなりました。これから関西学院がどうオリジナリティを追求するかを考えると、発祥の地に戻ることは重要な意味を持つていると思います。



お二人をご案内する中道院長



広々として厳かな雰囲気の中道院長



学芸員の北村さん(左)小阪館長(右)

北村 M・ヴィグノール氏が設計した建物は英国風のゴシック・スタイルで、ハンマービームトラスと呼ばれる大きなアーチ形の梁を組んで屋根を支えているのが礼拝堂の主な特徴です。レンガは耐久性に優れたイギリス積みを採用し、豊かな表情を見せています。建設当時、周りは大根畑だったそうで、関西学院旧制中学に通っていた直木賞作家の今東光がその様子を書いています。他にも詩人の竹中郁や小説家の横光利一が作品に残しており、それを見比べるのもたのしいですよ。

小阪 関西学院は1929(昭和4)年に上ヶ原に移転しましたが、図書閲覧室となっていたチャペルはそのまま残りました。しかし1945年の神戸大空襲で被災し、チャペル尖塔と屋根が抜け落ちてしまいました。



葡萄の蔓模様のアーチ窓



礼拝堂と小集会室、塔からなる神戸文学館

当時の姿を復元 学院発祥の地に残る 旧礼拝堂の神戸文学館

1904(明治37)年、関西学院のチャペルとして建てられた由緒ある建築の神戸文学館。丘陵地の原田の森に建てられた美しいレンガ造りの建物は、当時の明治の人々に強い衝撃を与えました。小説家や詩人がチャペルや関西学院周辺のことを書き残しています。神戸にゆかりのある文学者や作品を紹介する文学館で、館長の小阪英樹さんと学芸員の北村暁子さんにお話を伺いました。

塚本 神戸文学館の前身は、原田の森キャンパスの礼拝堂だったそうですね。

小阪 礼拝堂が建てられたのは1904年です。アメリカの銀行家であるジョン・ブランチ氏が1万2800円(当時)を投じて建て、ブランチ・メモリアル・チャペルと呼ばれていました。設計はイギリス人のM・ヴィグノール氏、施工は吉田伊之助氏でした。玄関横には「明治三十七年建設」と刻まれた礎が残っています。

塚本 非常に残念ですね。

北村 そうですね。1950年の神戸博覧会のパビリオンとして使うため塔を除いて修復され、その後は市民美術教室やアメリカ文化センター、神戸市立王子図書館などに使われてきました。そして、1993年に全面的な改修工事が行われ、古い写真を元に尖塔や柱頭の飾りを復元。以前の外観をよみがえらせました。また、ステンドグラスの窓は2種類のラムネ色で、葡萄の蔓模様を施し、昔のガラスのようならぎも再現しています。一部のレンガには焼夷弾の跡も残っているのですよ。阪神・淡路大震災も乗り越え、2006年に神戸文学館に生まれ変わりました。

塚本 敷地内の記念碑にはベーツ第4代院長の自筆サインやスクールモットー「Mastery for Service」などが刻まれ、旧礼拝堂階段の飾り石も配置されていました。こちらは学院初期の建築物として、唯一かつての原田の森キャンパスに現存するもので、感慨深いですね。

北村 市内に残る最古のレンガ建築でもあり非常に貴重な建物です。その優美な姿とともに、神戸ゆかりの文学を次代に受け継いでいきたいと思います。



説明を受ける塚本編集委員長



アーチ型の梁を見ることができる礼拝堂



関西学院発祥の地の記念碑「敬神愛人」



ミュージアムロードに面した石垣の石碑

これからの学校教育、また学校経営は大きな変革の時代を迎えることが予想されます。コロナ禍が加速させたオンライン技術やコミュニケーション手段が急速に教育現場に入ってきました。すでに初等部や中学部でも生徒一人ひとりがタブレットを持ち、授業を受けたり、勉強しているのは、鉛筆に代わってシャーペンシルを使い始めた私の中学時代には考えることもできない変化であります。この変化はますます加速し、10年もするとタブレット自体も過去の遺物になっているかもしれません。技術的な変革と共に、2040年頃には学校に通う生徒・学生の人口が、4分の3に減少すると言われています。この中でいかに学校が存続していくかが問われています。

考えられる方向性の一つは、社会の変化に対応できるように変革を追い求めていくことです。旧態依然とした教育体制では、おそらく取り残されることになるでしょう。そのために関西学院もさまざまな変化に対応していかなければなりません。その一方で、その変化の中で関西学院らしさを失い、他の学校と

変わらなくなってしまうならば、関西学院の存在意義がなくなってしまうと思います。

今回の母校通信の企画として、関西学院のルーツをたどる旅に加わらせていただきました。その中で、創立者W・R・ランバス宣教師の父親のJ・W・ランバス宣教師のお墓(神戸市外国人墓地)の前で、墓前礼拝をさせていただき、関西学院のルーツ、そしてコアコンピタンス(他者にはない独自の核となる力)について考えるひとときを持つことができました。

関西学院は、2000年以上も続くキリスト教、歴史の中で読み継がれている聖書に基づく教育機関であるということは大きな財産であり、130年を越える歴史の中で培ってきた関西学院の強みであります。この磐石な基礎の上に立つてこそ、大胆な変革ができると思っています。

非常に難しい時代ではありますが、幼稚園から大学・大学院にとどまらず、同窓の皆さまにおよぶ生涯教育機関としての関西学院の歩みを皆さまと共に進んでまいりたいと思っています。

中道基夫

王子公園・動物園で 初代原田の森 キャンパスの 名残を訪ねて

王子公園にはかつて、関西学院の校舎が建っていました。W・R・ランバース宣教師はまず1万坪の校地を購入。木造2階建の校舎兼学生寮と平屋建の食堂などからスタートしました。5人の教授と19人の学生で授業が開始されました。最初はブラック校舎だけだった原田の森キャンパスですが、上ヶ原に移転するまでの40年間に校舎が新築・整備されていきました。摩耶山を背景に赤レンガと緑の芝生のコントラストが美しいハイカラなキャンパスは地元の人々にも親しまれ、関西学院の催す運動会や音楽会などに多くの人が足を運んだとか。

現在は動物園やスタジアムなどを備え、市民の憩いの場となっている王子公園。動物園内には、校舎などがあつた場所にプレートが設置されています。遊園地はかつての運動場、アシカ池の近くには中央講堂がありました。中学部の校舎が建っていた動物科学資料館には、外壁の赤レンガの一部が壁に埋め込まれています。「こうしてプレート

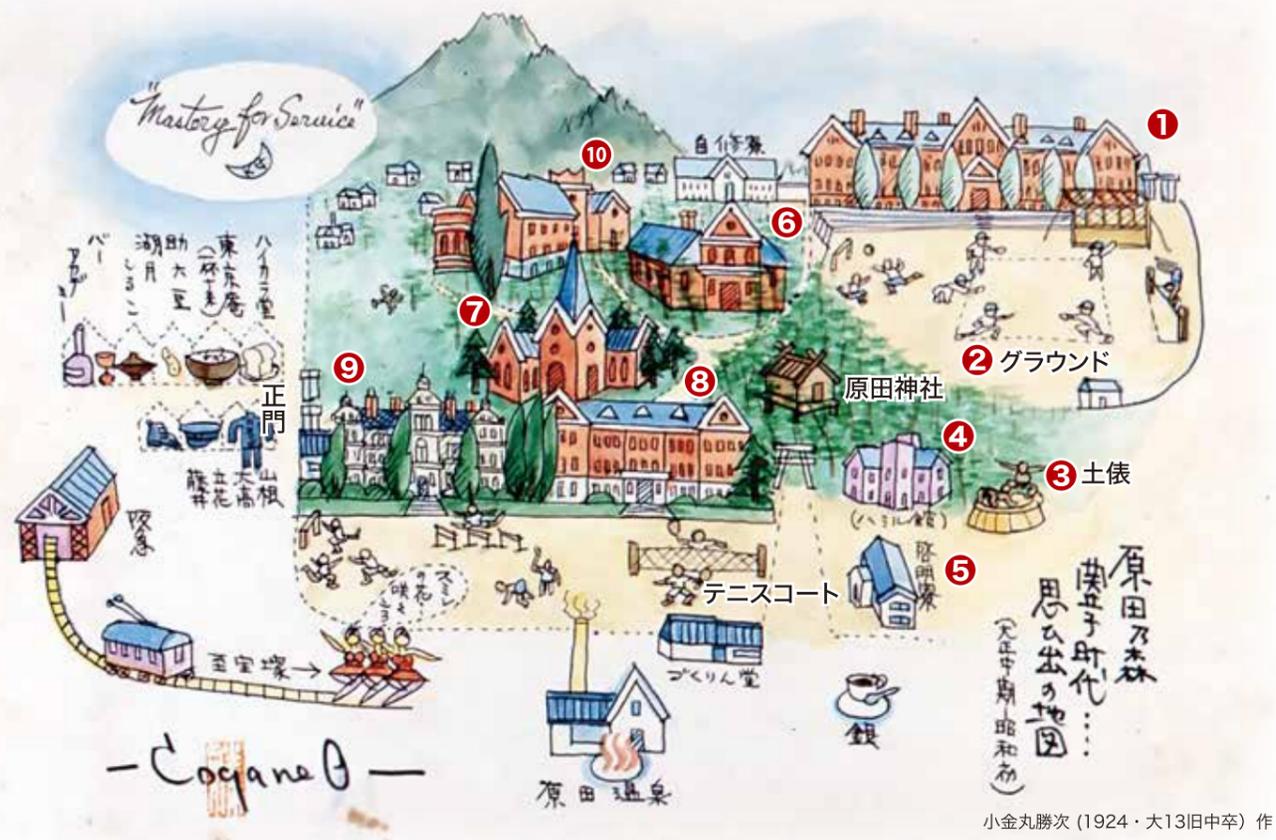
を辿りながら歩いていると、往時の様子が目に浮かぶようです」と塚本編集委員長。

神戸市では王子公園を学術・スポーツの拠点として再整備する方針案を打ち出しており、関西学院は大学誘致の公募への参加を検討しています。将来的には関西学院の新しいキャンパスが、開学の地に再び現れるかもしれません。



現在はコアラ館となっている神学館。神学部用の建物として、教室のほか小講堂、図書閲覧室、宗教博物館などがあつた。

⑩ 神学館
(創立35周年記念絵葉書)



小金丸勝次 (1924・大13旧中卒) 作



⑦ ブランチ・メモリアル・チャペル



④ ハミル館



① 中学部校舎



⑧ 高等商業学部校舎



⑤ 学生会館と啓明寮



② グラウンド



⑨ 本館



⑥ 中央講堂



③ 土俵



国鉄灘駅と関学生



原田の森キャンパス全景

今号記念企画に皆で知恵をしぼりました。表紙のまるで花が咲いたような150冊の母校通信。ここまで先人たちとともに頑張っ作り上げてきた証です。巻頭企画も2回にわたるシリーズでお届けします。乞う、ご期待!

塚本恵美子